



Title	アンチ・聖地巡礼アニメ : 『天体(そら)のメソッド』 論
Author(s)	杉本, 圭吾
Citation	層 : 映像と表現, 11, 108-128
Issue Date	2019-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/88027
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73534
Type	departmental bulletin paper
File Information	soranometho.pdf



アンチ・聖地巡礼アニメ——『そ天体のメソッド』論

杉本 圭吾

一、はじめに

「聖地巡礼」、あるいは「舞台探訪」と呼ばれる旅行行動がブームとなって久しい。とりわけ、コンテンツツーリズム¹の一ジャンルである、アニメにおける聖地巡礼（以下、アニメ聖地巡礼と記す）が想起されるが、アニメ聖地巡礼とは「アニメファンが、アニメの背景となった場所を見つけ出して、そこを訪ねること」²を指す。岡本健によると、アニメ聖地巡礼者の多くは単に場所を訪れるだけに留まらず、巡礼ノートへの記入、痛絵馬の奉納、痛車の乗り付け、コスプレなど、「アニメ聖地でさまざまな表現活動を行う」³ことが現在では一般的であるとされる。

二〇〇七年放映のテレビアニメ『らき☆すた』⁴を一つの契

機とするこの現象は、二〇一六年公開のアニメ映画『君の名は。』⁵のヒットを受けて、同年の「ユーキャン新語・流行語大賞」で「聖地巡礼」がトップテン入りを果たしたことにより、世間認知度は一つの極致に達したと言つてよい。

これに伴う、いわゆる聖地巡礼研究は、観光学を中心に様々な方面から行われているが、既存の研究動向を概括するならば、各地域の事例紹介か、いわゆる『らき☆すた』モデルを後追いつけるものが多かった。

アニメ聖地巡礼における『らき☆すた』モデルとは、山村高淑によると「作品を媒介とした交流を通してファンと地域社会、制作会社と地域社会が相互理解を深め、協働したまちおこし活動」⁶であり、「地元商工会が中心となつて、著作権者に許可をとつてストラップなどのオリジナルグッズの開発、販売、各

種イベントの実施などが行われた」⁷ 埼玉県久喜市鷺宮の事例を先駆とする。以降、この鷺宮の成功例に倣い、全国各地で競うようにしてコンテンツツーリズムによる地域活性化が企図されているが、それゆえに、従来のアニメ聖地巡礼研究、ひいてはコンテンツツーリズム研究の大多数は、経済波及効果を強調し過ぎるきらいがある。

そこで本稿では、『らき☆すた』モデルが登場して以降のアニメ聖地巡礼研究が、観光学的アプローチに寄りがちな現状を踏まえ、地域そのものの、そしてコンテンツそのものにウェイトを置いた分析を行う。具体的に論じるのは、二〇一四年一〇月から全一三話で放映され、脚本が久弥直樹、キャラクター原案がQP-flapper、監督が迫井政行による、Studio 3Hz制作のテレビアニメ『天体のメソッド』⁸である。

この作品の梗概は以下の通りである。中学生の古宮乃々香は、父の転勤により七年ぶりに、幼少期を過ごした霧弥湖町に帰ってきた。町は七年前と大きく変わり、湖の上に巨大な円盤が浮かんでいた。乃々香が町を離れた後に飛来したそれは、未だ全容は謎に包まれたままながら、現在では町のシンボルとなり、霧弥湖町の新たな観光資源となっていた。

荷解きをしていた乃々香は、突如家に上がり込んできた不思議な少女、ノエルと出逢う。彼女は乃々香のことを知っている

ようだが、乃々香は思い出すことができない。

新学期を迎え、土産物屋・しいはら本舗の娘、椎原こはるや、レストラン・のぞみ亭の娘、水坂柚季と打ち解けるが、周囲とのコミュニケーションを避ける孤高の少女、戸川汐音からは拒絶されてしまう。一方、柚季は何故か円盤を目の敵にしており、たつた一人で円盤排斥運動をしていることが原因で、双子の兄の湊太とは犬猿の仲になっていた。汐音と仲良くなりたい、柚季と湊太に仲直りして欲しいと奮闘する乃々香だったが、なかなかうまくいかない。

ある日、自分と亡き母しか知らないはずの思い出の歌を、ノエルが口ずさむのを耳にした乃々香は、ようやく七年前の出来事を思い出す。かつて五人は友達だったこと。五人で円盤を呼んだこと。乃々香が東京へ引越してしまふことを皆に説明できないまま霧弥湖町を離れ、数々の「約束」を反故にしまったこと。そして、その「約束」を七年間も忘れていたこと。怒った柚季には拒絶され、汐音には見捨てられ、五人の関係は空中分解してしまう。バラバラになってしまった関係を修復し、また仲の良い五人に戻りたいと強く望む乃々香は、時にノエルの助けを借りながら奮闘する。しかし、実はノエルは、七年前に『皆がいつまでも仲良くいられますように』という願いに呼ばれてやってきた円盤そのものだったため、五人が元の関

係に戻ることは、ノエルが消えることを意味していた。

その事実を知り、再びぎくしゃくする五人。願いを叶えなければノエルは消えない。しかし、五人の願いが叶うことがノエルの願いでもあった。ノエルのおかげで元の関係に戻れたのだから、今度はノエルの願いを叶えてやるべきだという湊太の考えに皆も同調し、笑顔でノエルと別れようと決意する。

詳しくは後述するが、この作品は主に洞爺湖をモデルとした地域を舞台としており、アニメ聖地巡礼を喚起するように作られているという側面を持つ。実際、本作品のファンによる巡礼も行われており、一般社団法人アニメツリーズム協会選定の「日本のアニメ聖地⁸⁸」にも、『天体のメソッド』と洞爺湖が選ばれている。

舞台に洞爺湖が選ばれた理由についての製作者側からの言及は、管見の限り見受けられない。しかし、作品の制作発表会は洞爺湖温泉観光協会などが主催するアニメコンベンション「TOYAKOマンガ・アニメフェスタ（以下、TMAFと記す）」の中で行われ¹⁰、アニメのエンディングの取材協力テロップにも「一般社団法人 洞爺湖温泉観光協会」と「TOYAKOマンガ・アニメフェスタ事業推進委員会」の記載がみられることから、アニメ聖地巡礼による洞爺湖の地域活性化を狙って仕掛けられた作品であることが容易に推測できる。

しかし、この作品は単なる観光ガイドとしての評価に留まるもののだろうか。むしろ、観光学的アプローチから離れて分析を行うことで、何らかの批評性を持つ作品として新たな評価軸をもたすことができるのではないだろうか。そこで本稿では、アニメ聖地巡礼が一般化した二〇一〇年代中盤において、明らかにアニメ聖地巡礼を狙って制作された『天体のメソッド』を、作品に由来する巡礼の展開と実態を捉え直しつつ、特に作中における円盤表象に注目しながら作品内容を検討することで、地域コンテンツとしての『天体のメソッド』の持つ批評性を明らかにしたい。

なお本稿では、先述したようなアニメに由来する観光行動を便宜上「アニメ聖地巡礼」、アニメ聖地巡礼を喚起する元となるアニメを便宜上「聖地巡礼アニメ」と表記する。

二、アニメ聖地巡礼と洞爺湖

先述したが、『天体のメソッド』では洞爺湖が主な作品舞台となっている。作品の内容に入る前に、まずはアニメ聖地という側面から洞爺湖という地域について考えてみたい。

洞爺湖に「由来」するサブカルチャーコンテンツは複数存在する。一つ目は『銀魂』の聖地。『銀魂』とは、二〇〇四年か

ら二〇一八年まで雑誌『週刊少年ジャンプ』に連載¹¹されていた少年漫画である。複数回にわたるアニメ化、アニメ映画化、果ては実写映画化まで為されている人気作品で、知名度言えば多くの深夜アニメを凌駕する。『銀魂』は、洞爺湖が直接的な舞台として描かれているわけではなく、主人公の愛用する木刀に「洞爺湖」という銘がある程度の接点のみで、地域との繋がりは希薄である。しかし、作中にこれらのエピソードが登場すると、洞爺湖温泉街の土産物屋において木刀の売り上げが増加し、現在では『銀魂』がきっかけで洞爺湖を巡礼するファンも多い。

二つ目は、洞爺湖で開催される「TOYAKOマンガ・アニメフェスタ(TMAF)」のイベントは、二〇一〇年の洞爺湖温泉誕生百周年記念事業として開始されたアニメコンベンション¹²で、プログラムは、コスプレダンスパーティ、痛車展示、同人誌即売会、キーワードラリー、アイドルステージ、声優のトークイベント、そして温泉街全域のコスプレ会場化などがある。二〇一〇年の約三千人から、回を重ねるごとに集客を伸ばし、二〇一五年には約六万人が参加している。『天体のメソッド』の放映年には、作品の制作発表会など地域との関連性が高いイベント開催があったものの、プログラムの「ほとんどは地域と直接な関係を持たない」¹³催しである。

その一方で、洞爺湖を「由来」ではなく「舞台」とするサブカルチャーコンテンツは非常に少ない。『天体のメソッド』以前のコンテンツ作品を見ると、管見の限りでは、日常系四コママンガ『ひだまりスケッチ』の、二〇一二年放映のテレビアニメ第四期『ひだまりスケッチ×ハニカム』において、修学旅行で洞爺湖を訪れた回に洞爺湖の風景が登場した例。そして、アニメ化や実写ドラマ化もされている麻雀マンガ『咲-Saki-』において、「有珠山高校」という架空の学校の回想シーンが、二〇一四年七月から一二月に雑誌『ヤングガンガン』に掲載された際に、洞爺湖の風景が登場した例。この二例しか存在しない。つまり『天体のメソッド』が登場するまで、洞爺湖を主要な「舞台」として描かれたサブカルチャーコンテンツは実質的に存在しなかったのである。

洞爺湖とコンテンツとの親和性について、鎗水孝太はTMAFにおけるコスプレイベントについて触れつつ、次のように論じている。

実際のところ「コスプレ」という行為が地域の中で、特に地域振興の文脈において表れてくる必然性はないだろう。また、そのようなイベントが地域振興に役立つのかという疑問は少なからず出てくるだろう。「地域」とい

う空間、地域資源を用いていても単にそれがロケーションとして消費されるのみならば、それは地域資源とはなり得ない¹⁴。

このようなイベント型の地域活性化の手法の中で課題となるのは、地域資源との連携だろう。サブカルチャーコンテンツだけではなく、洞爺湖独自の資源に触れ、洞爺湖という地域のファンになる人は現れているだろうか。それを考えるに象徴的なのが、閉会式の光景のように思われる「…」参加者全員で記念撮影をし、それぞれ参加者が主催者である地元の人々に駆け寄り親しく言葉を交わす¹⁵。

これらの視点は、現在のアニメ聖地巡礼研究が「まちおこし」や「地域活性化」のように、地域そのものやコンテンツそのものを後景化し、他者との繋がりを志向することを前提に置いて議論であることがわかる¹⁶。

他方で鎗水は『天体のメソッド』の制作発表がTMAF内で行われたことに触れ、「地域とアニメ・サブカルチャーコンテンツの結びつきが二重化した状況が、地域やイベントにどのような影響を与えるのか、注目していかねばならない」¹⁷と

論は結ばれており、『天体のメソッド』が当初から、洞爺湖におけるコンテンツリズムにおいて、重要な位置を担うことが展望されていたことがわかる。

三、洞爺湖観光PRアニメとしての『天体のメソッド』

それではここで、『天体のメソッド』の中で地域はどのように描かれ、アニメ聖地巡礼をどのように喚起しているかについて見て行こう。

『天体のメソッド』は、「霧弥湖町」という、洞爺湖温泉街をモデルとした地域が主要舞台となっている。「霧弥湖町」というネーミングは、同じく北海道にある摩周湖の霧のイメージが掛かっているものと思われ、札幌市をモデルとしたサブ舞台の「北安市」についても、字面だけを見ると北見市が想起される。また第七話に登場する「幌美内」は、千歳市と伊達市にそれぞれ同名の字がある。

キャラクターの名前も同様で、例えば乃々香は洞爺湖温泉にある野口観光グループの観光ホテル「ザ・レイクビューTOYA 乃の風リゾート」から、柚季は洞爺湖温泉街の東端に掛かる「ゆうづき橋」から取られていると考えられる。

このように、『天体のメソッド』は洞爺湖を中心に北海道各

地から背景のモデルが取られていることもさることながら、北海道への意識の強い作品でもある。他にも例えば、「八月の時点で二学期が始まる」「十一月の時点で雪が降る」といった季節設定が為されているほか、第七話では駅舎の横に北海道地図の立て看板が登場するカットがあり、物語が「北海道の中で」の出来事であることを如実に示している。

さらに言えば、オープニング主題歌を担当したのが、北海道に拠点を置き、北海道出身者で構成されている音楽クリエイター集団「Ive」に所属する Larval Stage Planning で、作曲家もIveの高瀬一矢。Iveはアニメ主題歌を始め、特にゲーム主題歌の分野において第一線で活動しており、また、北海道を拠点に制作活動をしていることも、アニメ・ゲームファンの間では広く知れ渡っている。この点からも「北海道を意識した」つくりのアニメだと言える。

先述したように、『天体のメソッド』はアニメ聖地巡礼を喚起するように作られている側面を持つ。安達清治によれば、観光産業は交通機関、宿泊機関、フードサービス施設、関連施設、旅行会社等によって成り立っている¹⁸。また佐藤喜子光は、観光の舞台装置の構成要素は、食の文化である「顎」、交通機関である「足」、快適な安眠場所である「枕」、観光対象となる「場」、それらを繋ぐ域内連絡の「輪」の五つであると述べ、

人々の感動を増幅させる舞台装置をいかに的確に構築するかが、価値の高い旅行商品であると述べている¹⁹。

以上を踏まえて話を『天体のメソッド』に戻すと、これら観光にとつて重要な要素が描写に多く盛り込まれている。例えば第五話で、柚季と湊太の実家でもあるレストラン「のぞみ亭」で、ノエルがオムライスを食べるシーンが登場するが、モデルとなった洞爺湖町のカフェレストラン「望羊蹄」にも同じメニューが存在する。また、こはるの実家は「しいはら本舗」という土産物屋だが、これもモデルは壮瞥町にある土産物屋「民芸御殿」である。さらに第六話では、霧弥湖町内の観光ホテルに宿泊して温泉に入浴するというエピソードがあり、このモデルも洞爺湖温泉街にある。果ては、乃々香たちの通学のためのバス車両も実在の「道南バス」を模した車両である。このように、顎も、場も、枕も、足も描かれているこの作品は、アニメ聖地巡礼者による観光消費行動を喚起するような仕掛けを意識的に配置していると言える。

そのほか、実際に『天体のメソッド』に由来する観光が、洞爺湖でどのように展開されているかを現地で取材したが、例えば洞爺湖温泉バスターミナルの建物内でキャラクターパネルの展示がされていたり、地元の土産物屋で作品の関連グッズコーナーが特設されていたり、小規模ではあるがファン向けの展開

が確認できた。

ところで、アニメ聖地巡礼、ひいてはコンテンツツーリズムが何を持って成功とするのか、ということは定義づけが難しい。観光学的アプローチから見ると、例えば増淵敏之は「聖地を訪れたファンが定住化する事例もあると聞いているが、やはり現実的には集客の効果が核であることに間違いはない」²⁰、松本淳は「コンテンツの地域展開における第一の価値とは一言で言えば「ブランド」ということになる」²¹とし、経済波及効果を強調する。他方で岡本健は、経済以外の側面として「宇宙的なコミュニティが観光というきっかけによって開かれる構造」²²に着目し、コミュニケーションという社会的側面に基軸を置く。

しかし『天体のメソッド』の場合、二〇一四年の放映以降、執筆時現在までに続編やメディアミックスなどの展開²³が無いことも理由の一つではあるが、他作品と比較²⁴しても経済面も社会的側面も小規模であると言わざるを得ない。

このように、経済や人的交流を重視する観光学的アプローチからでは、作品評価に限界があることが分かるだろう。そこで観光学的アプローチから離れて、作品論として、コンテンツそのものを批評的に捉え直す必要があるのではないかと考えている。次章以降で詳しく検討していきたい。

四、「円盤」の想像力

先述したように、『天体のメソッド』はファンタジー的な想像力の上に展開される青春群像劇だが、作中で一際異彩を放つのは、「円盤」の存在である。ビジュアルとしては、いわゆる未確認飛行物体を模したような形状で湖上に浮かぶ円盤（次頁上図）²⁵だが、作中では主に「ノエルというキャラクターそのもの」「五人が繋がるために寄与するギミック」「町の風景に溶け込んだ異物」として描かれている。ではこの「円盤」は、どのような意図で設定されたのだろうか。

本作で脚本を担当した久弥直樹は、ビジュアルノベルのシナリオライターとして『MOON』『ONE〜輝く季節へ〜』『Kanon』などを手掛け、ビジュアルアーツを退社後は小説『サクラカグラ』の執筆や、メディアミックス作品『sola』の漫画原案・アニメ脚本原案を手掛けている。久弥は作品に共通して、人間ドラマを展開する上でファンタジー要素を散りばめた世界観の構築を得意とする作家だ。

例えば、一九九九年に発売され、後にアニメ化もされたビジュアルノベル『Kanon』では、主人公と各ヒロインとの関係性が物語の根幹を為すが、実は正体が主人公の前に化けて現れた子狐だったヒロイン・沢渡真琴、超能力者であるがゆえに幼



図 湖上に浮かぶ円盤

初期の言霊の具現化に囚われるヒロイン・川澄舞をはじめ、主人公に関わるヒロインの設定にファンタジー要素が組み込まれている。

また二〇〇七年放映のテレビアニメ『sola』(NOMAD制作、小林智樹監督)は、久弥直樹が関わるアニメとしては『天体のメソッド』の直近にあたる作品である。物語は高校生たちの日常を描きつつも、ヒロインの四方茉莉を始め、

「夜禍人」と呼ばれる、超常的な能力を有するも夜にしか生きられない存在が物語のギミックとして機能する。また、その設定ゆえに茉莉が青空に憧憬を抱くキャラクターとして描かれており、その点からも『天体のメソッド』の「円盤」には『sola』からのある種の連続性を見て取れることもできるだろう。

久弥直樹はインタビューにおいて、『天体のメソッド』の「円盤」とは何か、ノエルとは何者だったのかという質問に対して、次のように語っている。

一応、僕の中での設定は固めてはいますが、あえて作中ではそこに触れないようにしました。というのも、SF的な要素はあるけれど、物語の主軸はあくまでも乃々香たち少年少女が織りなすドラマなんです。一度離ればなれになってしまった乃々香たちの絆が、再びひとつになっていく。その過程におけるそれぞれの心の機微をしつかり描くことが一番大切だと思いましたし、SF方面に物語を持つていってお話の主軸がブレてしまうのは避けたかったです²⁶。

つまり、「円盤」はあくまでも物語の主軸である乃々香たちの人間ドラマを効果的に描くためのガジェットとして用いられている。しかし、「円盤」が「SF的な要素」であると久弥自身語るように、ファンタジー的な想像力²⁷を持つ効果を期待して用いられたと考えられる。それでは、このような意図で描かれた円盤は、作中では本当にどのように機能しているのだろうか。

五、和解の〈場〉としての「円盤」

この章では、作品内容に即した分析を行う。舞台を洞爺湖などから取ったことで、その舞台が物語にどう生かされ、どのような効果を生み出しているのだろうか。

この作品の主題は、オーブニング主題歌の歌詞にも登場し、またオーブニング映像でも印象的に表現されている「約束」である。その約束を果たすこと、つまりこの作品は「和解」への「メソッド」が描かれた物語である。これらを踏まえ、舞台装置の中でも特に、円盤が浮かぶ場所としての「湖」の描写から見て行こう。

まずは乃々香に注目する。物語で乃々香は、汐音との関係性が特に重要なフアクターとなるが、回想シーンに見られる幼少期においては、湖畔は汐音との出会いの場として描かれている。

こはる 汐音は、乃々香のお母さんに逢ったことがあるの？

乃々香 うん。汐音と友達になるきっかけをくれたのが、お母さんだったから……。

『本当に友達になりたいなら、もっと「にっこり」しなさい』²⁸

しかし物語の冒頭、第一話で湖畔に立ち寄った乃々香は汐音から「今更、何をしに戻ってきたの？」と拒絶されてしまう。なんとか汐音と仲良くなりたいと奮闘する乃々香は、時にノエルの仲介を挟みながら、物語の終盤、第一一話でようやく、汐音と七年越しの和解を果たす。そして、最終話になると、ベンチに二人が並んで座り、互いに友情を確認し合う場として湖畔は描かれているのである。

乃々香 汐音。

汐音 どうしたの？

乃々香 子どもの頃、ここで一人座ってる女の子を見かけたの。……そのとき思ったの。『絶対この子と友達になるんだ』って。『友達になれなかったら、一生後悔する』って。

……あの日、出逢ったのがあなたでよかった。

汐音 ええ、私も²⁹。

また、『天体のメソッド』は、乃々香と汐音に限らず、乃々香と柚季、こはると柚季、柚季と湊太など、五人それぞれの和解の物語でもある。例えば柚季は、昔のことを忘れていた乃々香に怒り、衝動的にビンタしてしまったことで一時的に疎遠に

なるが、柚季が乃々香に、その時の許しを乞うシーンも湖畔で展開される。

柚季 乃々香、お願い！ あたしを殴って！

乃々香 えっ……どうして？

柚季 ずっと心に残って消えないの……。乃々香にひどいことして……。だから、もし、あたしのこ
と許してくれるなら、思いつき殴って！ お
願い！ 乃々香！³⁰

また、物語開始時から兄妹仲が悪かった柚季と湊太。その兄妹仲を巡って一時的にすれ違いが起きていた柚季とこはる。それぞれのわだかまりが解けるシーンも湖畔で展開される。

湊太 遅かったな。

柚季 あたし……あたし……！

乃々香 柚季、ごめんね。花火、ダメだった。

柚季 違うの！ 謝らないといけないのは……！ 悪
いのは……！

乃々香 柚季っ！

柚季 ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！

ずっと謝りたかったの……乃々香にも、こはるにも、お兄ちゃんにも！³¹

このように、五人の和解に纏わる場は全て湖畔である。この時ノエルは、彼らの和解を仲介しつつも見届ける役割を担っている。ノエルの正体は円盤そのもので、湖畔という場はその仲介者たるノエルが、和解の瞬間を見届ける場所になるため、湖という舞台装置は作中で重要な役割を果たしている。つまり、湖畔であればどの岸であっても見届けることができるというところ、円形である湖は作用しているのである。

円盤の正体としてのノエルの描かれ方を見ていくと、第一話で、天文台で再会した乃々香とノエルの背後で円盤が輝き出す。また第二話で、ノエルが乃々香に「円盤、嫌い？」と尋ねるなど、物語序盤から円盤とノエルとの間になんらかの関係性があることが視聴者に示唆されている。物語中盤ではノエルが自ら自分が円盤であると公言するシーンも見られるが、ノエル自身が純真無垢で天真爛漫なキャラクターであるがゆえに、子どもの戯言として周囲には捉えられる。

第七話では、乃々香たちが母親の墓参のために霧弥湖町を離れるが、一緒に行くことを誘われたノエルは、「遠くだと円盤が見えないから」と言って霧弥湖町に留まる。ノエルが初めて

霧弥湖町を離れるのは、乃々香たちの中学校の文化祭に行く第九話で、中学校のある北安市³²へ向かうバスの車中、後部座席の窓から物悲しげな表情を浮かべて円盤を眺めるノエルが描かれる。そして第一〇話で、ノエルは文化祭の最中に力を失ったように倒れてしまい、ここでノエルの正体が円盤だということが明らかにされる。

再び、乃々香と汐音の和解について見てみよう。この二人の和解は、全一三話のうち実に一一話分も掛けて行われる、ストーリー上でも特に重要な要素の一つである。第一二話で、五人の復縁を見届けたノエルは姿を消す。再び乃々香が目覚めたとき、時間は霧弥湖町へ引越してきたその日に戻っていた。しかし、その霧弥湖町は、湖上に円盤がない霧弥湖町だった。

乃々香 そんなこと、あるのかな？

本当に、全部が夢で。本当に、ノエルは居なくて。本当に、本当に……。

……っ！ 汐音？

汐音 久しぶりね。

乃々香 うん、七年ぶりかな？ 覚えてる？ 子どもの頃ここで……。

汐音 私が覚えてるのは……。

乃々香 ……っ。

汐音 私が覚えてるのは、流星群の夜に見た、あの子の涙。

乃々香 ……。

汐音 あの子が、ノエルが大好きなのは、そんな顔じゃないでしょ？³³

乃々香 良かった。みんながノエルのことを忘れていて。

私、何もできなくて。でも、汐音が覚えていてくれて良かった。私だけじゃないって分かっただけでも……。

汐音 本当にそれでいいの？

乃々香 えっ？

汐音 私が良く知っている「乃々香」って女の子は、一度こうしたいって決めたら、絶対に最後まで譲らないような、まっすぐで、素直で、そんな言葉にいつの間にかみんなの心が動かされていく……。

乃々香 ……汐音？

汐音 私の知っている『友達』は、そういう女の子だったはずだけど、違った？³⁴

自分は確かにノエルと過ごした記憶があるのに、ノエルに関する記憶を、こはるも柚季も湊も覚えていない事実には乃々香は愕然とする。それまでどんな困難にも前向きに取り組んできた乃々香が、初めて挫折してしまう場面が第一二話で描かれる。そんな乃々香の許に駆けつけて手を差し伸べるのは、それまでの一話分を掛け、やつとの想いで和解した、かつて乃々香にとっての一番の友達だった汐音なのだ。このように、五人のうち、特に乃々香と汐音の和解は作品の根幹を為す。ノエルは確かに重要キャラクターとして位置づけられるも、「五人が繋がるために寄与するギミック」として描かれている点で言えばあくまでトリックスター。『天体のメソッド』とは、乃々香たち五人、特に乃々香と汐音の和解までのメソッド³⁵を描いた物語と言えるのである。

ところで、このような「ノエルⅡ円盤」の存在は、五人を繋ぎとめる目に見えない友情のメタファーとして機能しているが、それは作品の主題の補強としてしか機能していないようにも見える。実際、作中では「円盤」とはなんだったのか、「円盤」そのものであるノエルとは何者だったのか、ということに対する回答は得られない。そのためか、この作品では視聴者の間での「円盤」に対する評価は正直芳しくない。

感想投稿サイト等からいくつか例を挙げると、「円盤が何で

女の子が何でっていう説明がはっきりされないまま物語が進んでつてからなんかこう置いてきぼり感がある」「UFOとか宇宙人とか出しちゃうんだつたらもつと突き抜けてしまえばよかったのに。変に日常にとどめ居ようとして逆に違和感を覚える状態になってしまっている」「現実寄りの不思議な話」とした世界で、「ノエルはUFOだから」↓スルーみたいなのは釈然としません。³⁶といったように、円盤に対する違和感もたらされている。主題が「五人の和解」という人間ドラマだっただけに、元来それを効果的に表現するための「円盤」は、ともすればノイズとして見なされているのだ。

しかし、このノイズにこそ、制作側も意図していなかった効果が表れているのではないだろうか。次の章では、改めて虚構空間から現実空間へ、つまり実際の地域へと戻って考察してみよう。

六、「円盤」が描くメタファー

『天体のメソッド』では、洞爺湖という、元来その土地への求心性が高い地域が舞台として選ばれている。それ故、先述したように『天体のメソッド』が最初からアニメ聖地巡礼を前提とした作品づくりが為されているように見える。

これまで見てきたように、この作品の根幹は主人公を中心とした五人の関係である。先述したように、「ノエルⅡ円盤」は、サブカルチャー文脈における円盤というコンテクストの効果を期待して、霧弥湖上空に浮かべられた舞台装置だと考えられる。円盤の正体は実はノエルであった、という点を除外した上で、作中で円盤に関する描写を拾ってみよう。物語開始時点の七年前に霧弥湖上に突如飛来した円盤は、現在もその全容は解明されておらず、警戒のための「円盤対策費」と称した予算が行政から計上されている。しかし、特に住民への直接的な害が見られるわけではなく、現在では霧弥湖町の名物として町に溶け込んでいる。

湊太 この「円盤まんじゅう」って、昔食ってた「温

泉まんじゅう」と何が違うんだ？

こはる 見た目、かなあ？

湊太 しかし、アレ（著者注…円盤）のせいでお前も

大変だな……。

こはる そんなことないよ？ おかげでお客さん増えた

わけだし、いろんなお客さんと話すの、楽しいから³⁷。

こはるの実家である土産物屋・しいはら本舗が特に顕著だが、霧弥湖町では円盤を新たな観光資源とみなして様々な展開が行われている。作中においてその転換は、こはるのセリフと、多くの観光客で賑わうしいはら本舗の描写を見る限り、成功していると言っても良いだろう。

ところで、『天体のメソッド』では主題に沿った形で、洞爺湖をモデルとした霧弥湖という地域が表象されているが、他方で、実際の洞爺湖と比較したとき、表象されなかったものが存在する。それは、噴火災害の歴史である。

洞爺湖自体はカルデラ湖であり、近隣には有珠山や昭和新山などの活火山がある。洞爺湖温泉街の開発は、一九一〇年の有珠山噴火により誕生したと考えられる温泉の湧出によって始まり、一九二九年の洞爺湖電気鉄道の開通を受けて、旅館・ホテルの開業が相次いだ。そして一九四四年の昭和新山の誕生と、一九四九年の支笏洞爺国立公園の指定を経て観光地として成長した地域である³⁸。

このように、洞爺湖観光と火山とは不可分の関係にあるのだが、この作品では火山に纏わる描写が一切見られない。ここで話が円盤に戻ってくるのだが、「突如、町にやってきたもの」という括りで捉えるのであれば、「円盤の飛来」を「噴火」のメタファーとして、単純にスライドさせて捉えることも不可能

ではない。しかし、作中において円盤は、住民への直接的な害は特に見られず、むしろ円盤観光などの新たな価値として定着していることは先に述べた通りだ。

火山にまつわる表象が無かった理由として、一つは全一三話一クールという時間的制約によって削られたという身も蓋もない理由が考えられもするだろう。しかし円盤の「新たな価値」という描写は、既存の円盤表象コンテクストの異化として、こうは考えられないだろうか。つまり、円盤に仮託されている「訳の分からない新たな価値」とは、すなわち「コンテンツツーリズム(アニメ聖地巡礼)」そのものである、と。円盤は噴火のメタファーではなく、アニメ由来のツーリズムそのもののメタファー。サブカルチャーへの理解が薄い地域住民にとつてみれば、アニメファンもまた謎の円盤に値するのである。

先に、洞爺湖における『銀魂』などの事例や、『天体のメソッド』に由来する聖地巡礼が実際に確認できた事例を挙げたように、無論、現在ではサブカルチャーコンテンツに由来する観光は無視することができない。しかし、先に述べた『らき☆すた』モデルでは、それが成功例であるがゆえに、既存研究でもアニメ聖地巡礼の負の側面はあまり触れられない。

しかし例えば、二〇〇六年から放映された『ひぐらしのなく頃に』³⁹は、岐阜県の白川郷が舞台のテレビアニメだが、作中

で猟奇殺人が描かれるという内容のため、聖地巡礼者は白川郷の地域住民から嫌悪感を抱かれていたという事例⁴⁰もある。

ここで、「訳の分からない新たな価値」に関連して『天体のメソッド』の中から例を引こう。ともに観光施設の娘である柚季とこはるだが、円盤を巡っては物語の前半における柚季とこはるの態度は対照的である。柚季は円盤に対する敵意をむき出しにし、たった一人で円盤排斥運動⁴¹をしている。一方こはるは、「しいはら本舗」の看板娘として、円盤観光に積極的に参与するのだ。

柚季が排斥運動をするようになった原因は、かつて円盤が飛来したまさにその日に、花火大会の会場ではぐれた柚季を探していた兄の湊太が自転車で転んで大怪我を負ったショックを、すべて円盤の飛来に仮託して自分自身を守ろうとした結果なのだが、こはるは「円盤」新たな価値を受け入れているのに対し、物語の前半時点ではいまだショックを受け止めきれなかった柚季は「円盤」新たな価値を受け容れられず、こはるへのあてつけのように、しいはら本舗の敷地内で円盤排斥運動を行なうのだ。しかし、湊太やこはると和解することによって、過去の責任転嫁を受け入れた柚季も、ようやく「円盤」新たな価値を受け入れることになる。

この時、円盤の出現以来、湖上での花火打ち上げが七年前か

ら中止されている、という事実が語られる。この描写は、柚季と湊太たちとのわだかまりが解ける際にギミックとして作用する。しかしこれは同時に、円盤をアニメ聖地巡礼のメタファーとして捉えて考える際に重要である。すなわち、花火大会の中止は既存の地域コンテンツの消滅であり、円盤観光は新たなコンテンツを取り込んだ観光と言えるのだ。

これを実際の洞爺湖観光に当てはめるなら、中止された花火大会は噴火災害の歴史にあたり、ここでは火山とは、アニメ聖地巡礼によって捨象されつつある既存の地域資源になる。『天体のメソッド』において、洞爺湖の風景を描写する以上、火山に関連する風景そのものを完全に消し去ることはできないが、そこから噴火に纏わる文脈が消し去られることで、「かつての地域資源」を示す無言の語りともなろう。

七、アニメ聖地巡礼を顕在化させる「円盤」

『らき☆すた』モデルを念頭に、アニメ聖地巡礼がもたらす可能性について論じた岡本健は、次のように述べている。

本書では、観光が他者性を持った他者との交流の回路を開く可能性をメインのテーマとしている。[...] 事前期

待の中には、地域の人々との交流はない場合がほとんどだろう。そのようなことは予想していない。つまり、他者性を持った他者との交流は意図されていない。しかし、現地に赴くと、そこには地域住民が住んでいる。ここに、他者性を持った他者と偶然につながる契機がある⁴²。

他者性を持った他者との繋がりを創出する可能性を、アニメ聖地巡礼に見出すこと。それは例えば、萌え神輿、萌えグッズ製作、コスプレイベントといった、アニメファンと地域住民との「協働」に象徴されるような、『らき☆すた』モデルのアニメ聖地巡礼である。

『天体のメソッド』は「和解」を主題にした物語であることは既に述べた通りである。その意味で、人と人との繋がりを志向しているように見えるが、実際に描かれているのは既存の関係性の修復であって「他者性を持った他者との繋がり」ではない。物語は一貫して、五人の関係性がどう動くかに重点が置かれており、五人とそれ以外の他者との接点は希薄である。

他者との「協働」という観点から作品内容を見たとき、作中の「花火大会の中止」について改めて考察してみよう。第五話で乃々香は、柚季のために、円盤飛来以降中止されている湖上での花火打ち上げを復活させるべく、行政、商工会、花火職人

らに協力を募るなど奮闘するのだが、結果としてそれは失敗に終わっている。この描写は地域を巻き込んだ「協働」の失敗と言えよう。

このことに関連して、広島県竹原市を舞台にしたテレビアニメ『たまゆら』⁴³に由来するアニメ聖地巡礼の実態を論じた風呂本武典は、巡礼するファンが「単なる消費者であり、街づくりに関わるプレイヤーなどではない」と見做され、地域自体が「外来のアニメファンを協業者として迎える気がない」⁴⁴事例を挙げ、「らき☆すたモデル」があくまでも成功事例の一つに過ぎないことを看破する。

話を『天体のメソッド』に戻すと、円盤飛来以降の霧弥湖町の歴史を知らないという側面は持つものの、乃々香自身は外部の人間ではなく地域住民そのものであるため、「花火大会復活の失敗」という描写を「地域協働の失敗」と単純に置き換えることはできない。しかしここで注目すべきは、『天体のメソッド』という作品が、洞爺湖への聖地巡礼を意識的に喚起する作りになっているが、現実のアニメ聖地巡礼を問い直すような構造が内包されて描かれているということである。

確かに、この作品を通じてアニメ聖地巡礼を企図したファンの中に、地域協働を見据えたn次の観光価値を創出する人々が皆無とは言えないが、希薄であると言わざるを得ない。ここで

敢えて『らき☆すた』モデルの尺度から見ると、n次の観光価値の創出が失敗に終わっているという点で『天体のメソッド』は批判に値する作品なのかもしれない。

しかし、既存のコンテンツリズム研究が称揚する、『らき☆すた』モデルに代表される形でアニメ聖地巡礼は、必ずしも必要条件ではないことは留意すべきだろう。そしてそのようなアニメ聖地巡礼の現状と課題を、図らずも『天体のメソッド』という作品は炙りだしているのである⁴⁵。

改めて円盤表象に戻ってみよう。作中で「円盤」は作品の主題である「和解」の象徴であり、作品に違和をもたらすノイズでもあった。そして、アニメ聖地巡礼そのものを仮託した「訳のわからない新たな価値」であった。

同じく洞爺湖を「聖地」とする『銀魂』が、主人公の木刀の銘という希薄な接点において巡礼を喚起したことが顕著な例だが、聖地巡礼を喚起するアイコンは無根拠性を持つ。石岡良治が述べるように、舞台の選定は「シンボリックな都市の記号ではなく、もっと細かい、スタッフが足を運んで取材しないと分からないような場所が多く選ばれている」⁴⁶。例えば先の『らき☆すた』の鷺宮を始め、普通の県立高校の校舎が聖地化した『涼宮ハルヒの憂鬱』⁴⁷の例を出すまでもなく、ゼロ年代以降のアニメ聖地は、元は変哲のない土地・謂れない土地である。

このことに関連して、福嶋亮大はアニメ聖地巡礼の性質について次のように述べている。

アニメの世界とファンの世界がいわば並行的に進んでいること、つまり聖地巡礼（現実世界を虚構世界に合わせて修正すること）とアニメの疑似自然化（虚構世界を現実世界に合わせて修正すること）が、完全に表裏一体で、相補うように機能している「…」⁴⁸

作中で「円盤」は、それ自体が「虚構の観光資源」として描かれており、「新しい観光資源」の作中内メタファーとして機能している。と同時に、「円盤」に仮託された物語の主題も、「虚構の観光資源」として「アニメ聖地巡礼」という作中外メタファーとして機能し、現実空間との接点を有する。元来、ファンタジー的な要素であったはずの「円盤」が、現実空間とのかかわりを志向したとき、単なるファンタジー的な要素としてのガジェットに留まらないアイコンとなる。

つまり『天体のメソッド』は、無根拠なノイズでありながらも、作品内外に影響力を持つ二重のメタファーである「円盤」の存在によって、本来は虚構であるはずの要素が現実との接点を切り結んでしまうという、「アニメ聖地巡礼」の成立の過程

そのもののメカニズムを顕在化させている。そして、そのメカニズムの顕在化によって、アニメ聖地巡礼という現実が問い直されることになるのだ。

言い換えれば、虚構としての「円盤」——そして「円盤」に仮託されたアニメ聖地巡礼という虚構内外の二重のメタファー——が現実と虚構の関係を反転させる「アンチ性」⁴⁹を内包しているという意味で、この作品は「アンチ・聖地巡礼アニメ」と言えないだろうか。このような批評性を内在的に有するという点において、『天体のメソッド』を、単なる観光ガイドに留まらない作品として評価できるだろう。

八、終わりに

本稿における論点を纏めよう。先述したように、『天体のメソッド』はファンタジー的な想像力の上に展開される青春群像劇である。想像力の効果を期待されて設定された「円盤」は、作中では「ノエルというキャラクターそのもの」「五人が繋がるために寄与するギミック」「町の風景に溶け込んだ異物」として描かれていた。

「ノエル＝円盤」の存在は、乃々香たち五人の友情のメタファーとして機能するが、「円盤」そのものに対する謎が残さ

れたままだったため、「五人の和解」という主題を効果的に表現するはずが、作品に違和をもたらすノイズと見做されていた。

しかし、そのノイズとしての円盤は、既存の円盤表象コンテンツの異化である。「訳の分からない新たな価値」つまり「アニメ聖地巡礼」そのもののメタファーでもあった。「円盤」はそれ自体が「虚構の観光資源」として描かれており、「新しい観光資源」の作中内メタファーとして機能すると同時に、「円盤」に仮託された物語の主題も「虚構の観光資源」Ⅱ「アニメ聖地巡礼」という作中メタファーとして機能し、現実空間との接点を切り結ぶ。

この、虚構空間・現実空間の双方に二重の繋がりを持つ「円盤」という存在によって、本来は虚構であるはずの要素が現実との接点を切り結んでしまうという「アニメ聖地巡礼」の成立の過程そのもののメカニズムが顕在化する。虚構に由来する無根拠なアイコンによって現実空間が観光資源となる。それが作中において、「円盤」という形で寓意的に可視化されている。このように、『天体のメソッド』は、アンチ・聖地巡礼アニメとしての批評性を持った作品として、評価できるのである。

注

1 「地域に関わるコンテンツ（映画、テレビドラマ、小説、マンガ、

ゲーム等）を活用して、観光と関連産業の振興を図ることを意図したツーリズム」

国土交通省・経済産業省・文化庁『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査報告書』、二〇〇五年。

2 岡本健『n次創作観光——アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』、NPO法人北海道冒険芸術出版、二〇一三年二月、五〇頁。

3 岡本健『コンテンツツーリズムの現場からみる空間概念——現実・情報・虚構空間をめぐる観光旅行のあり方』、『地理』、古今書院、二〇一五年六月号（第七一九号）、二〇一五年六月、四頁。

4 京都アニメーション制作、山本寛（第四話まで）、武本康弘（第四話以降）監督の、二〇〇七年放映のテレビアニメ。原作は雑誌『コンプティーク』に連載中の、美水かがみの四コママンガ。

5 コミックス・ウェブ・フィルム制作、新海誠監督の二〇一六年公開のアニメ映画。

6 山村高淑「コンテンツツーリズムというアプローチ——アニメコンテンツと地域社会をめぐる新たな潮流とその特性から」、岡本健、遠藤英樹（編）『メディア・コンテンツ論』、ナカニシヤ出版、二〇一六年六月、二四二頁。

7 岡本健、前掲論文、五頁

8 製作委員会方式を採用しており、製作クレジットには「霧弥湖町観

光協会」と表記されている。

9 一般社団法人アニメツーリズム協会が、二〇一八年度版を二〇一七年八月二六日に、二〇一九年度版を二〇一八年一〇月二九日に発表したもので、海外を含めたWEB投票の結果や、各作品権利者、各地方自治体との協議を踏まえて選定したとされる。しかし、結果に対して異議の声も少なくないことから、背後に思惑が絡んでいることが考えられるが、本稿の射程を外れるため以上の言及を差し控える。

10 『天体のメソッド』制作発表会レポート、『TVアニメ「天体のメソッド」公式サイト』<http://sora-no-method.jp/special/140627-happyokai.php>、最終閲覧日：二〇一八年一〇月三十一日。

11 連載終了後は掲載紙を『ジャンプGIGA』に変え、「完結篇」を二〇一九年より連載予定である。

12 鎗水孝太「TOYAKOマンガ・アニメフェスタ」——観光とサブカルチャーイベント、岡本健（編）『コンテンツツーリズム研究——情報社会の観光行動と地域振興』、福村出版、二〇一五年八月、一六三頁。

13 張慶在「コンテンツツーリズムとしてのポップカルチャーイベント——TOYAKOマンガ・アニメフェスタの事例を通して」『International Journal of Contents Tourism』、北海道大学観光学高等研究センター、第一巻、二〇一七年三月、四七頁。

14 鎗水孝太「コンテンツの「消費」の仕方と地域との出会い——「コスプレ」というコンテンツ文化」、岡本健、遠藤英樹（編）『メディア・コンテンツ論』、ナカニシヤ出版、二〇一六年六月、二二二頁。

15 鎗水孝太、前掲共著（福村出版）論文、一六三頁。

16 それを踏まえてもお、イベント参加者と地元住民との記念撮影後の談笑を指して「地域資源との連携の象徴例」と言えるのかは疑問が残るが、本稿の射程を外れるためこれ以上の言及を差し控える。

17 鎗水孝太、前掲共著（福村出版）論文、一六五頁。

18 安達清治「ツーリズムビジネス」、創成社、一九九七年四月、二九頁。

19 佐藤喜子光「観光を支える旅行ビジネス——次世代モデルを説く」、同友館、二〇〇二年一月、一〇五頁。

20 増淵敏之『ローカルコンテンツと地域再生——観光創出から産業振興へ』、水曜社、二〇一八年九月、四〇頁。

21 松本淳「コンテンツビジネスの視点」、大谷尚之、松本淳、山村高淑（著）『コンテンツが拓く地域の可能性——コンテンツ製作者・地域社会・ファンの三方良しをかなえるアニメ聖地巡礼』、同文館出版、二〇一八年一〇月、二二頁。

22 岡本健「アニメ聖地巡礼の観光社会学——コンテンツツーリズムのメディア・コミュニケーション分析」、法律文化社、二〇一八年九月、二二三頁。

23 アニメ放映と前後して、浪咲ゆかの作画で雑誌『月刊コミック電撃

大王』にてコミカライズが連載されていたが、二〇一五年三月号の掲載を最後に中断。後に作者都合による連載休止となっている。

24 例えば、行政を巻き込んだ展開を行なっている『ラブライブ！サンシャイン!!』の沼津市の例や、コミュニティスペースにファンが毎週のように集う『ハイスクール・フリート』の横須賀市の例が挙げられよう。

25 『TVアニメ 天体のメソッド 公式ファンブック』、一迅社、二〇一五年四月、一〇二頁。

26 『TVアニメ 天体のメソッド 公式ファンブック』、一迅社、二〇一五年四月、一一四頁。

27 一九四七年の「ケネス・アーンホルド事件」以降、世界的なUFOブームが起こったが、日本ではアメリカでのブームを後追いする形で、文学、マンガ、アニメ等において、これらの想像力に基づく作品が多く登場し、現在に至っている。

長山靖生『戦後SF事件史——日本的想像力の70年』、河出書房新社、二〇二二年二月。

28 霧弥湖町観光協会『天体のメソッド』、二〇一四年。第七話。

29 同『天体のメソッド』、第一三話。

30 同『天体のメソッド』、第六話。

31 同『天体のメソッド』、第五話。

32 この作品では、霧弥湖町の他にいくつかのサブ舞台が登場する。中

学校のある「北美市」は札幌市をモデルとしているが、霧弥湖町から北美市までは路線バスで所要時間三〇分の通学圏内という設定になっている。実際の洞爺湖から札幌までの所要時間は、路線バスで二時間四十五分である。創作物では往々にして現実の地理空間と距離感は歪められるものだが、五人の中で唯一、汐音が北美市在住で霧弥湖町民でないことなどを踏まえると、この距離感の歪みは、乃々香と汐音の心理的な距離を表現していると言える、以下に述べる乃々香と汐音の「和解」に深く関わっていると言えるだろう。

33 前掲『天体のメソッド』、第一二話。

34 同『天体のメソッド』、第一三話。

35 乃々香と汐音の「和解」については、友情を「超」えるような、いわゆる〈百合的〉な関係性が示唆されているのだが、今回は指摘に留める。しかし、先述した「円盤」も含めて、このような様々なジャンルの「想像力」も取り込まれた作品であることは特筆すべきだろう。この件についての詳細な分析は本稿の範囲を出るため別稿を期したい。

36 「天体のメソッド」のレビュー感想／評価、『あにこれ』、https://www.anikore.jp/anime_review/8050/、最終閲覧日：二〇一八年一〇月三十一日。

37 前掲『天体のメソッド』、第一話。

38 佐藤郁夫『観光と北海道経済——地域を活かすマーケティング』、北

海道大学出版会、二〇〇八年四月、四三〜四九頁。

39 スタジオディーン制作、今千秋監督の、二〇〇六年から放映のテレビアニメ。原作は竜騎士07の同人ノベルゲーム。

40 神田孝治「白川郷へのアニメ聖地巡礼と現地の反応——場所イメー
ジおよび観光客をめぐる文化政治」、『観光学』、和歌山大学、第七号、
二〇一二年七月、二三〜二八頁。

41 主にしいはら本舗に来た観光客に向けて、ピラ配りや拡声器を用い
ての呼びかけなどで円盤の「危険性」を訴えるが、具体的に円盤の
何が危険なのか、円盤飛来による害はどのようなものかということ
は語られず、非常に抽象的なものとなっている。

42 岡本健、前掲書（NPO法人北海道冒険芸術出版）、九二〜九三頁。

43 ハルフィルムメーカー制作、佐藤順一監督の、二〇一〇年から発売
のOVAシリーズ、および二〇一一年から放映のテレビアニメ。

44 風呂本武典「内発的發展の思考によるコンテンツツウリズム——広
島県内の漫画アニメ地域振興事例の比較検討 たまゆら——竹原・朝
霧の巫女——三次」『広島商船高等専門学校紀要』、第三五号、二〇一
三年三月、六一頁。

45 まちおこしをテーマとした近年のサブカルチャーコンテンツには、
二〇一四年放映のテレビアニメ『普通的女子高生が【ろこどる】
やってみた。』(Feel)制作、名和宗則監督。原作は小杉光太郎の四コ
ママンガ)や、二〇一七年放映のテレビアニメ『サクラクエスト』

(PAWORKS制作、増井壮一監督)などがある。本稿の範囲を出る
ため言及しないが、これらの作品も、観光学的アプローチから離れ
た分析が求められよう。この点は今後の検討課題としたい。

46 石岡良治『視覚文化「超」講義』、フィルムアート社、二〇一四年六
月、二五一頁。

47 京都アニメーション制作、石原立也監督の、二〇〇六年および二〇
〇九年放映のテレビアニメ。原作は谷川流のライトノベル。

48 福嶋亮大「神話社会学7 自然の利用」、『ユリイカ』、青土社、第四
一卷第三号、二〇〇九年三月、二二三頁。

49 現実と虚構の反転の発想は、中井英夫の「アンチ・ミステリ」の定
義から示唆を受けている。

塔晶夫「講談社版あとがき」、中井英夫『新装版 虚無への供物
(下)』、二〇〇四年四月、四一三頁。初出：一九六四年。